

中間評価結果

大学名	北海道大学
研究施設名	遺伝子病制御研究所
拠点の名称	細菌やウイルスの持続性感染により発生する感染癌の先端的研究拠点
認定期間	平成 22 年度～平成 27 年度

1. 拠点の目的・概要

本事業では、感染癌に関する唯一の全国共同利用・共同研究の拠点として、関連する国内外の研究機関・研究者からの申請・要請を受けて共同研究を推進し、感染癌研究の新たな展開を図る。ヒト癌の約3割を占める感染癌の発生機序の解明、新規治療・予防法の確立に貢献するとともに国内外の教育研究水準の向上に資するものである。

2. 総合評価

(評価区分)

A：拠点としての活動は概ね順調に行われており、今後、共同利用・共同研究を通じた成果や効果が期待され、関連コミュニティへ貢献していると判断される。

(評価コメント)

共同利用・共同研究拠点としてのターゲットを「感染による発がんの先端的研究」と明確にし、優れた研究成果を上げている点などが評価できる。

今後は、エピジェネティクス研究時代への拠点としての対応を明確化するとともに、外国人研究者の受入れを一層活性化することが望まれる。

中間評価結果

大学名	北海道大学
研究施設名	人獣共通感染症リサーチセンター
拠点の名称	人獣共通感染症研究拠点
認定期間	平成 22 年度～平成 27 年度

1. 拠点の目的・概要

【目的】社会のニーズおよび関連研究者コミュニティの要望を踏まえ以下の使命を果たす。

- (1) 感染症病原体の自然宿主と伝播経路解明に関する基礎研究
- (2) 予防・診断・治療法の開発と実用化研究
- (3) 人獣共通感染症対策専門家の育成
- (4) 共同利用・共同研究拠点として国内外機関との連携協力

【概要】本センターが所有する施設、設備を全国の関連研究者の利用に供し、

- (1) 優れた研究環境で人獣共通感染症の克服に向けた共同利用・共同研究を推進し、新規学術領域を創成する。
- (2) 喫緊の国際課題である人獣共通感染症の克服に向けた共同研究・教育を飛躍的に進展させる。

2. 総合評価

(評価区分)

A : 拠点としての活動は概ね順調に行われており、今後、共同利用・共同研究を通じた成果や効果が期待され、関連コミュニティへ貢献していると判断される。

(評価コメント)

共同利用・共同研究拠点として感染症研究関連機関との連携を強化することにより、人獣共通感染症に関して優れた研究成果を上げるとともに、それらの成果が多くの大型研究や事業の展開に繋がっている点が評価できる。

今後は、大学として、研究者の雇用などを通じて本センターの研究力強化を図り、新興感染症に対して機動的に対応できる研究体制を構築することが望まれる。

中間評価結果

大学名	東北大学
研究施設名	加齢医学研究所
拠点の名称	加齢医学研究拠点
認定期間	平成 22 年度～平成 27 年度

1. 拠点の目的・概要

加齢関連のモデル動物を、共同研究を通じて戦略的に開発することで、加齢研究の中心軸を構築する。これに沿って加齢の基本メカニズム、および加齢を制御・修飾する生体防御機構を解明する。さらに人への応用として、加齢に伴う認知症などの脳・神経疾患や、難治性がんの先端的診断・治療法の開発を進める。これらの成果を応用展開することにより、国民の健康寿命を延伸し、心身の健康寿命を全うする、スマート・エイジングの実現につなげる。

2. 総合評価

(評価区分)

A：拠点としての活動は概ね順調に行われており、今後、共同利用・共同研究を通じた成果や効果が期待され、関連コミュニティへ貢献していると判断される。

(評価コメント)

共同利用・共同研究拠点として時代の重要なニーズを的確に捉え、加齢を軸としてバイオメディカルサイエンスの幅広い領域から優秀な研究者を集結させ、活発な研究活動が進められている点が評価できる。

今後は、共同利用・共同研究に学外や海外の研究者、大学院生の更なる参加を図ることが望まれる。

中間評価結果

大学名	群馬大学
研究施設名	生体調節研究所
拠点の名称	内分泌・代謝学共同研究拠点
認定期間	平成 22 年度～平成 27 年度

1. 拠点の目的・概要

本研究所が 21 世紀 COE プログラム、グローバル COE プログラム、特別教育研究経費による研究推進プロジェクト等の実施で蓄積した内分泌・代謝学の研究成果と創出技術を基盤にして、内分泌・代謝学研究者コミュニティの要望を受けた運営委員会が設定する共同研究課題を全国レベルで組織して世界的水準の共同研究成果を世界に向け発信する。

2. 総合評価

(評価区分)

A : 拠点としての活動は概ね順調に行われており、今後、共同利用・共同研究を通じた成果や効果が期待され、関連コミュニティへ貢献していると判断される。

(評価コメント)

共同利用・共同研究拠点として、内分泌・代謝に焦点を絞りレベルの高い研究が行われているとともに、若手の人材育成にも注力している点が評価できる。
肥満、糖尿病という競争の激しい分野の中で、今後は、国際的な活動も視野に入れつつ、拠点としての独自性や優位性を示した上で、より特色ある研究を行うなど戦略的に共同研究を推進することが望まれる。

中間評価結果

大学名	千葉大学
研究施設名	真菌医学研究センター
拠点の名称	真菌感染症研究拠点
認定期間	平成 22 年度～平成 27 年度

1. 拠点の目的・概要

先進諸国・発展途上国共通の社会問題である真菌感染症に関し、わが国における本領域の研究の核となり、真菌症に関する世界水準の研究拠点として共同利用・共同研究を推進する。また、真菌症の診断・治療法の基礎的開発、真菌の感染機構の解明、宿主の感染症防御機構の解明等を行うとともに、病原真菌の世界的な中核保存機関として、菌株の収集、保存、供給体制を整備し、わが国を中心とした研究者コミュニティの真菌症研究をサポートする。

2. 総合評価

(評価区分)

B：拠点としての活動は行われているものの拠点の規模等と比較して低調であり、今後、作業部会からの助言や関連コミュニティからの意見等を踏まえた適切な取組が必要と判断される。

(評価コメント)

真菌感染症研究に関する共同利用・共同研究拠点として、世界的な規模で貴重な菌株を有しており、広く利用に供することでコミュニティへ貢献している点については、一定の評価ができる。

一方で、共同研究課題数が少なく、研究実績も低調であることに加え、大学院生教育への貢献も十分でないことから、今後、現状の課題を十分把握した上で、例えば、臨床・免疫を含めた新たな真菌学領域への展開を図るなど、具体的な戦略を設けて活動を推進することが必要である。

中間評価結果

大学名	東京大学
研究施設名	医科学研究所
拠点の名称	基礎・応用医科学の推進と先端医療の実現を目指した医科学共同研究拠点
認定期間	平成 22 年度～平成 27 年度

1. 拠点の目的・概要

これまで教員の自発性の基で展開されて来た共同研究を医科学研究所(医科研)の知的・人的集積拠点の共同利用化に位置づけ、組織的な展開を図る。具体的には、先端医療研究開発共同研究領域(H22年度までゲノム・再生医療開発共同研究領域。H23年度に改組。)、疾患システム共同研究領域、感染症・免疫共同研究領域のコア領域で、がんや感染症等、現在の医科学的諸問題を解決するために広範な公募共同研究を実施・推進し、医科学研究水準の更なる向上を目的とする。

2. 総合評価

(評価区分)

S : 拠点としての活動が活発に行われており、共同利用・共同研究を通じて特筆すべき成果や効果が見られ、関連コミュニティへの貢献が多大であると判断される。

(評価コメント)

共同利用・共同研究拠点として基礎・応用医科学と先端医療を目指した医科学研究分野において、優れた研究成果を上げるとともに、共同利用・共同研究やセミナー等に大学院生や若手を積極的に参加させるなど若手の人材育成にも注力している点が高く評価できる。

今後、外国の研究機関の参加を呼びかけるなど、共同利用・共同研究の数や規模の更なる拡大を図ることにより、優れた研究成果の一層の創出が期待できる。

中間評価結果

大学名	東京医科歯科大学
研究施設名	難治疾患研究所
拠点の名称	難治疾患共同研究拠点
認定期間	平成 22 年度～平成 27 年度

1. 拠点の目的・概要

- 難治疾患の病因・病態形成機構解明と診断・予防・治療法開発の基盤形成に資する共同利用・共同研究拠点構築を目的とする。
- 「疾患バイオリソース」、「疾患モデル動物」、「疾患オミックス」の3つの難治疾患研究リソースを活用した公募型の戦略的難治疾患克服共同プロジェクトを推進する。
- 国内外の研究者に、上記のリソース群へのアクセスや現有する先端解析支援施設の利用機会の提供を行ない、本邦の難治疾患研究の広範な発展に貢献する。
- 難治疾患研究に携わる若手研究者の育成・支援システムを整備する。
- シンポジウム等の開催により、難治疾患研究の啓発と最先端情報の発信に努める。

2. 総合評価

(評価区分)

A：拠点としての活動は概ね順調に行われており、今後、共同利用・共同研究を通じた成果や効果が期待され、関連コミュニティへ貢献していると判断される。

(評価コメント)

共同利用・共同研究拠点として、先端的な研究施設・設備やデータベースを整えるとともに、組織を改変しながら時代のニーズに対応できる研究体制の整備を行い、優れた研究成果を上げている点が評価できる。

今後、国内のみならず世界的な拠点を目指していくに当たっては、難治疾患における研究対象の絞り込みや目標の明確化を図ることが望まれる。

中間評価結果

大学名	新潟大学
研究施設名	脳研究所
拠点の名称	脳神経病理標本資源活用の先端的共同研究拠点
認定期間	平成 22 年度～平成 27 年度

1. 拠点の目的・概要

21世紀における脳疾患の病態解明・治療法開発、ひいてはヒトの脳の働きやこころの仕組みを理解することへの堅実なヒト脳科学の発展を望む研究者コミュニティの要請に応えるべく、本研究所に創立以来蓄積されてきた膨大な脳神経疾患に関わる臨床病理学的研究資源（脳神経病理標本資源）とそれに関わる専門的な知識・技術を基に、多種、多様な共同研究を創出、推進すると共に、将来の脳神経病理学を含むヒト脳科学を担う若手研究者を教育・育成する。

2. 総合評価

（評価区分）

A：拠点としての活動は概ね順調に行われており、今後、共同利用・共同研究を通じた成果や効果が期待され、関連コミュニティへ貢献していると判断される。

（評価コメント）

共同利用・共同研究拠点として、質の高い脳神経病理標本の蓄積、提供を通じ、優れた研究成果を上げるとともに、若手の人材育成にも注力している点が評価できる。

今後は、我が国の神経病理学の中核拠点として、関連する他の国内機関との差別化を図るとともに、戦略的に国際的な共同研究を推進することが望まれる。

中間評価結果

大学名	富山大学
研究施設名	和漢医薬学総合研究所
拠点の名称	和漢薬の科学基盤形成拠点
認定期間	平成 22 年度～平成 27 年度

1. 拠点の目的・概要

和漢薬の基礎科学研究から臨床科学研究までを網羅する研究体制を構築してきた本研究所に集積された技術、知識などの学術情報、和漢薬資源および研究環境を活用した共同利用・共同研究の実施を通して、和漢医薬学の科学基盤を確立し、それにより和漢薬の機能を活用した新たな医薬品や和漢薬方剤の開発、治療体系の確立に貢献することを目指す。

2. 総合評価

(評価区分)

C：拠点としての活動が十分とは言えず、作業部会からの助言や関連コミュニティからの意見等を踏まえた事業計画の適切な変更が必要と判断される。

(評価コメント)

共同利用・共同研究拠点として、和漢薬に関する貴重な標本を有しており、優れたデータベースを構築しつつある点については、一定の評価ができる。

一方、和漢薬に関する研究戦略、研究戦術が適切でなく、期待される研究成果が上がっていない点は改善を要する。

今後、薬物の作用機構に関する西洋医学との融合や、漢方薬が有する複雑系の解析に対する数理的方法論の応用など、和漢医薬学の科学基盤形成拠点として、最新の研究動向を踏まえて戦略を立て直す必要がある。

中間評価結果

大学名	金沢大学
研究施設名	がん進展制御研究所
拠点の名称	がんの転移・薬剤耐性に関わる先導的共同研究拠点
認定期間	平成 23 年度～平成 27 年度

1. 拠点の目的・概要

がんの中でも死亡率が高い「転移と薬剤耐性の研究」に焦点を当てた中核的研究施設としての研究水準を保ち、共同利用・共同研究拠点として先導的な共同研究を推進し、転移と薬剤耐性に代表される「がんの悪性化進展」の分子機構の解明、およびそれを克服する新たな治療戦略の開発に貢献することを目的とする。そのために、転移と薬剤耐性機構に重要な「がん幹細胞」、「がん微小環境」の分子機構を中心とした本研究所独自の研究資源および研究技術をがん研究コミュニティに提供し、共同研究の推進を実施する。

2. 総合評価

(評価区分)

A：拠点としての活動は概ね順調に行われており、今後、共同利用・共同研究を通じた成果や効果が期待され、関連コミュニティへ貢献していると判断される。

(評価コメント)

共同利用・共同研究拠点としてがんの転移と薬剤耐性に焦点を絞って特色ある活動を展開しており、学術資料や分析機器の利用者へのサポート体制を充実し、質の高い論文を発表するとともに、大学院生の参加を通じて若手の人材育成にも注力している点が評価できる。

今後は、国内の他のがんセンターやがん研究機関との差別化等についての方針や計画を明確化することが望まれる。

中間評価結果

大学名	京都大学
研究施設名	再生医科学研究所
拠点の名称	再生医学・再生医療の先端融合的共同研究拠点
認定期間	平成 22 年度～平成 27 年度

1. 拠点の目的・概要

再生医学・再生医療の着実な発展を望む研究者コミュニティの要望に応えるべく、本研究所に集約された再生医学の知識・技術を基に、多様な先端的共同研究を推進するとともに、再生医学研究・再生医療を積極的、意欲的に担う研究者を教育・育成することを目的とする。共同利用・共同研究拠点として、全国的な再生医学の総括的研究、また分野横断的・学際的研究の推進、さらに、再生医療の臨床応用に向けて、技術、マテリアルの全国的標準化に寄与する。

2. 総合評価

(評価区分)

A：拠点としての活動は概ね順調に行われており、今後、共同利用・共同研究を通じた成果や効果が期待され、関連コミュニティへ貢献していると判断される。

(評価コメント)

共同利用・共同研究拠点として再生医療の総括的研究と臨床応用に向けた研究の推進に不可欠な施設・設備・データベースを整備し、多くのインパクトの高い研究成果を上げるとともに、それら研究成果の多くが大型研究プロジェクトの展開につながっている点が評価できる。

一方、同大学の CiRA (iPS 細胞研究所) や iCeMS (物質-細胞統合システム拠点) の設立により、当研究所の特徴が不明瞭になっていることから、今後、各機関と議論を行い、拠点としてのミッションを明確化していくことが望まれる。

中間評価結果

大学名	京都大学
研究施設名	ウイルス研究所
拠点の名称	ウイルス感染症・生命科学先端融合的共同研究拠点
認定期間	平成 22 年度～平成 27 年度

1. 拠点の目的・概要

本事業は、ウイルス感染症・生命科学分野で先端的な研究実績をあげてきたウイルス研究所が、研究者コミュニティの要望に応えるために、共同利用・共同研究拠点として、遺伝子から細胞・個体レベルに至る多様な共同研究を推進するとともに、次世代を担う人材を育成するものである。

2. 総合評価

(評価区分)

A：拠点としての活動は概ね順調に行われており、今後、共同利用・共同研究を通じた成果や効果が期待され、関連コミュニティへ貢献していると判断される。

(評価コメント)

共同利用・共同研究拠点として、霊長類やマウス用の P3 感染実験室などウイルス感染研究を推進するために不可欠な施設・設備を整備し、それらが有効に活用されるように多様な支援策が講じられており、多くの優れた研究成果につながっている点が評価できる。

今後は、共同利用・共同研究への外国の研究機関の参画を促進するとともに、研究者コミュニティ全体の意見を聴取する取組が望まれる。

中間評価結果

大学名	大阪大学
研究施設名	微生物病研究所
拠点の名称	微生物病共同研究拠点
認定期間	平成 22 年度～平成 27 年度

1. 拠点の目的・概要

微生物病に関する研究の発展と新興・再興感染症に対する迅速な取り組み、およびこれらの研究に携わる研究者の教育・養成は、極めて大きな社会的課題である。本研究所を共同利用・共同研究拠点として整備することで、本研究所に集約・設置された感染症学・生体応答医学の知識・技術・研究施設を研究者コミュニティや異分野の研究者に提供し、多様な先端的共同研究を推進するとともに、感染症学・生体応答医学を積極的、意欲的に担う研究者を教育・育成する。

2. 総合評価

(評価区分)

S : 拠点としての活動が活発に行われており、共同利用・共同研究を通じて特筆すべき成果や効果が見られ、関連コミュニティへの貢献が多大であると判断される。

(評価コメント)

共同利用・共同研究拠点として先端的な研究設備やデータベースを整えており、感染症・免疫学分野において、多くの優れた研究成果の創出を通じて国内外の感染症対策研究に多大な貢献をしているとともに、学位指導やセミナー等を通じて若手の人材育成にも注力している点が高く評価できる。

今後、共同利用・共同研究への外国の研究機関の参画を促進することにより、優れた研究成果の一層の創出が期待できる。

中間評価結果

大学名	広島大学
研究施設名	原爆放射線医科学研究所
拠点の名称	放射線影響・医科学研究拠点
認定期間	平成 22 年度～平成 27 年度

1. 拠点の目的・概要

全国の放射線研究者に、先端的かつきわめて専門的な研究施設・サービスを利用した研究を行う基盤を提供することにより、我が国の放射線影響・医科学研究を強力に推進する。また、当該分野の人材育成を、特長ある大学院教育と連携して進める。加えて、福島原発事故の健康影響を解明する共同研究を推進し、それらを基礎として福島県民・避難民の支援を行う。

2. 総合評価

(評価区分)

A：拠点としての活動は概ね順調に行われており、今後、共同利用・共同研究を通じた成果や効果が期待され、関連コミュニティへ貢献していると判断される。

(評価コメント)

共同利用・共同研究拠点として大量ゲノム・エピゲノム解析を通して、放射線障害や発がんなどの研究分野で質の高い論文を発表している点が評価できる。

一方、対象とする領域が必ずしも放射線と密接な関係を持たない研究テーマなどへも拡散傾向にあることから、今後は、造血システムに限った DNA 修復や白血病化に関するテーマに特化するなどの検討を行うことが望まれる。

中間評価結果

大学名	徳島大学
研究施設名	疾患酵素学研究センター
拠点の名称	酵素学研究拠点
認定期間	平成 22 年度～平成 27 年度

1. 拠点の目的・概要

最先端酵素学を基盤とする医学応用のための共同利用・共同研究拠点の形成（人材養成、病態、創薬理論、粘膜ワクチン共同研究）を目的として実施する。具体的には、プロテオミクス、メタボロミクス、構造解析などの最先端酵素学の知識と研究に必要な技術、ノウハウ、リソースを全国の研究者に提供すると共に、社会が求める医学応用研究を進める。以上の活動を通して、酵素学中核拠点としての充実と研究活動の促進を図る。

2. 総合評価

（評価区分）

A：拠点としての活動は概ね順調に行われており、今後、共同利用・共同研究を通じた成果や効果が期待され、関連コミュニティへ貢献していると判断される。

（評価コメント）

共同利用・共同研究拠点として、優れたプロテオミクス解析能力に基づく共同研究により成果を上げるとともに、人員整備や共同研究スペースの拡充などの面で大学からの支援が得られている点や、若手の人材育成にも注力している点が評価できる。

今後、拠点としてのミッションについて検討を行い、酵素学の新たな展開に向けた、具体的な方向性を示すことが望まれる。

中間評価結果

大学名	九州大学
研究施設名	生体防御医学研究所
拠点の名称	多階層生体防御システム研究拠点
認定期間	平成 22 年度～平成 27 年度

1. 拠点の目的・概要

多階層（ゲノミクス・エピゲノミクス、プロテオミクス、構造生物学、発生工学）の新規技術開発の共同利用・共同研究を推進して、生体防御に関連する多階層情報を明確に体系化して提供すること、及び生体防御システムとその破綻による疾患メカニズムの解明に関する先端的学際的共同研究を推進することにより、多階層の基盤科学技術を格段に発展させ、我が国の生体防御領域の学術研究を世界最高水準レベルに引き上げることを目的としている。

2. 総合評価

（評価区分）

A：拠点としての活動は概ね順調に行われており、今後、共同利用・共同研究を通じた成果や効果が期待され、関連コミュニティへ貢献していると判断される。

（評価コメント）

共同利用・共同研究拠点として、バイオメディカルサイエンス分野における先端的な研究施設や設備を整備し、優れた研究成果を上げるとともに、共同利用・共同研究へ大学院生を参加させるなど、若手の人材育成にも注力している点が評価できる。

今後は、外国の研究機関の参画を促進するなど、共同利用・共同研究の利用者数を増加させることにより、優れた研究成果の一層の創出を図ることが望まれる。

中間評価結果

大学名	長崎大学
研究施設名	熱帯医学研究所
拠点の名称	熱帯医学研究拠点
認定期間	平成 22 年度～平成 27 年度

1. 拠点の目的・概要

熱帯医学研究拠点では、これまでの国際的な活動実績とアジア・アフリカ感染症研究施設などの研究基盤を背景として、国内の多様な領域の研究者とともに、感染症の流行する現場に根ざした共同研究を企画し遂行する。さらに地球規模で流行する感染症に関する研究に資する情報やサンプルのリソースセンターとして、研究会の開催や研究支援サービスを行う。上記の活動により、感染症制御に資する知と技を創造する研究者コミュニティの維持活性化を拠点の目的とする。

2. 総合評価

(評価区分)

A：拠点としての活動は概ね順調に行われており、今後、共同利用・共同研究を通じた成果や効果が期待され、関連コミュニティへ貢献していると判断される。

(評価コメント)

共同利用・共同研究拠点として、熱帯医学分野において、外国の研究機関からの参加者も得て、高いレベルの研究活動を推進し、成果を上げている点が評価できる。

今後は、国際連携の中で拠点の特色を活かした貢献を果たすとともに、大学院生に対する共同利用・共同研究活動への参加を促進するなど、積極的に若手の人材育成に取り組むことが望まれる。

中間評価結果

大学名	熊本大学
研究施設名	発生医学研究所
拠点の名称	発生医学の共同研究拠点
認定期間	平成 22 年度～平成 27 年度

1. 拠点の目的・概要

発生学の視点から生命現象とヒト疾患の解明を目指す国際レベルの共同研究を賦活化することで、我が国における発生医学分野の研究基盤を確立し発展させることを目的とする。発生医学の先端的研究、恒常的視野に立った人材育成、国内外の連携ネットワークの活用により、発生医学の共同利用・共同研究を推進する。胚形成から個体形成に至る発生過程の仕組みを分子、細胞、組織、器官、個体へと連続する観点から解明することで、様々な発生異常やヒト疾患の病因を明らかにし、診断法や予防法の確立を目指す。さらに、臓器再建等の安全で有効な治療法を実現する発生医学分野において、我が国における共同研究の中核として役割を果たす。

2. 総合評価

(評価区分)

A：拠点としての活動は概ね順調に行われており、今後、共同利用・共同研究を通じた成果や効果が期待され、関連コミュニティへ貢献していると判断される。

(評価コメント)

共同利用・共同研究拠点として、発生学・幹細胞研究分野で優れた研究成果を上げるとともに、研究設備の拡充や技術職員・支援者の雇用などの面において、大学からの支援が十分に得られている点が評価できる。

今後は、大学院生に対する学位指導や共同利用・共同研究活動への参加を促進するなど、積極的に若手の人材育成に取り組むことが望まれる。